明るさ・にぎわい・気配りで
地域に根ざす開かれた病院づくり

帝京大学医学部附属病院新館／東京都板橋区

総合監理／帝京建設
設計監理／石本建築事務所・山下設計 JV

繊細な陰影と重厚感が印象的なアースカラーの建物外観。川に沿って弧を描く低層のカーテンウォールの内側が外来待合。7階から上の高層部は、静かな療養空間を確保した病棟エリアとなっている。

外来待合ラウンジのガラスカーテンウォールは石神井川の桜並木の樹冠に面しており、春はピンク、夏は緑、秋は紅葉と四季折々の桜の姿が明るい自然光とともに楽しめる。

病院棟と新大学棟の間を通る貫通通路は、地域の人々が広いキャンパスを迂回せずに東西の通り抜けができる貴重な道。通路両端の小広場には、川の蛇行でできる入江のような場所の名にちなんで“わんど”広場と名付けられた。

コンビニエンスストア、フードコート、コーヒーショップ、クリーニング店、銀行の5店舗が入ったコミュニティストリート。第2期工事では向かい側に店舗が増やされるという。

明るい雰囲気と広々とした空間を持つ病院

桜並木の続く石神井川のほとり、東京都板橋区の加賀地区は保育園から小中高校と多くの学校が集まる文教地区。中でも帝京大学は大きな存在感を放っています。1971年の医学部設置後に開院した帝京大学医学部附属病院は、特定機能病院として常に高度な医療を地域に提供してきました。

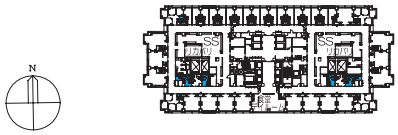
近年新たなキャンパス建替え計画により、第1期工事として老朽化した病院建物の全面建替えを行いました。2009年5月に、外来診療と検査部門などが入った低層部と病棟とで構成される病院棟と、大学本部機能を持つ本部棟がリニューアルオープンしました。

敷地面積約5ヘクタール、地上19階というスケールの大きな建物の計画に際し、周辺環境と地域に住む人々にはさまざまな配慮がなされています。その代表が、北側に第2期工事として予定されている新大学棟と新病院との間に設けられた貫通通路でしょう。石神井川からキャンパスを北西側へ伸びる約200mの貫通（自由）通路は、付近を歩く人々の通り抜けの利便性を高めると同時に、広い敷地内の風通しをもよくしています。川に面した通路の東端部分は、腰掛けて休めるベンチもある小広場としてしつらえられ、狭い街路が多い周辺環境の中にあってホッとできる空間となっています。

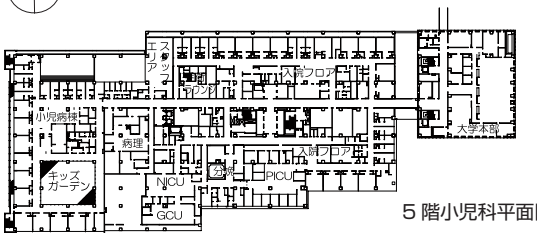
貫通通路に面した低層棟の1階には“コミュニティストリート”がつくられました。ガラスのアトリウム内にコンビニエンスストアやフードコート、カフェなどの店舗が並ぶ明るい空間で、患者さんや病院関係者はもとより地域住民から学生まですべての人に開放されたふれあいの場所となっています。「明るくて誰もが自由に入ってこられる“病院らしくない病院"にしたかったのです」と話すのは、設計施工に対する総合監理を行った帝京建設の代表取締役社長・冲永靖さん。

オープン性への高い指向は建物内の各所にも見られます。低層部2・3階の外来エリアは、石神井川に面した南西側をガラスのカーテンウォールにし、そこに待合ラウンジを配置しました。ガラスを通して自然光や川沿いの並木の緑が取り込まれ、広々とした明るい待合となっています。

低層部最上階の6階には、院内スタッフや外来者を問わず誰でも利用できる、職員食堂を兼ねた展望レストランが設置され、7階には気軽に外気に触れて気持ちをリフレッシュできる屋上庭園が整備されました。病棟に入院している患者さんもここには気軽に降りてきて、外の新鮮な空気に触れたり四季折々の花々やハーブの緑を楽しんだり、また歩行訓練などのリハビリテーションにも利用することができます。同様に5階の小児科病棟では、廊下に囲まれたキッズガーデンが明るい空間づくりの大きな役割を与えられました。

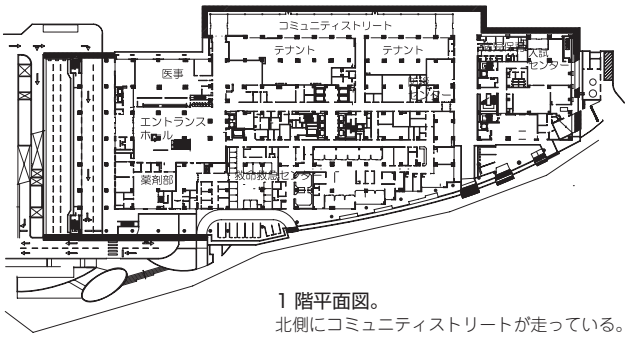


病棟基準階平面図。



５階小児科平面図。

２階外来エリア平面図。



１階平面図。
北側にコミュニティストリートが走っている。

計画事業が進み、新しい大学棟や大広場ができる頃には、地域に開かれ一体となった、内も外も明るい光にあふれる一大メディカルエリアが誕生することでしょう。

配置も設備も気配り満載のトイレ

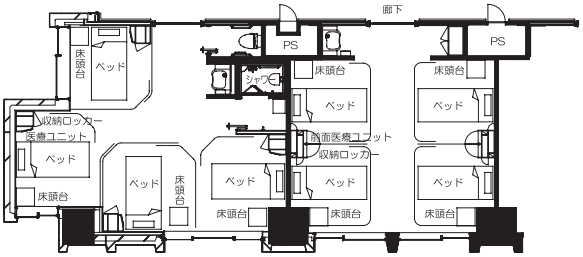
病棟のトイレは、分散配置型と集中型の双方が採用されています。

個室はすべて、シャワーユニット併設のトイレが装備されています。シャワーを使う際にトイレ部分が水に濡れないよう、設計時にはモックアップで実験を繰り返し、独自の工夫を盛り込みました。４床室は、集中トイレを使用する部屋と室内にトイレが付く部屋の２タイプに分かれています。室内のトイレはシャワーユニット併設型と単独型の２種類。そして車いす対応の多目的トイレは、１フロア２看護単位の病棟の計２ヵ所に置かれました。

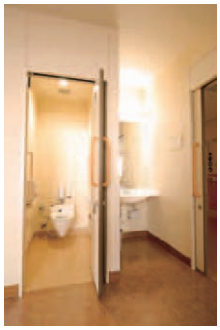
配置計画は病院側の運用と密接につながっています。男性用・女性用・多目的トイレがセットになった集中トイレは、トイレなしの４床室が並ぶ廊下の向かい側に配置されました。設計を担当した石本建築事務所プロジェクト推進室設計・監理主事の遠藤眞人さんは「車いすの方や松葉杖を使う方など、さまざまな患者さんがいる一般４床室をまず考慮しました。配置は部屋の近くにし、車いすでも入れる広いものも用意する、という考え方です」と語ります。

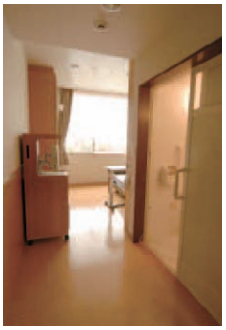
低層棟６、７階屋上に設けられた庭園は展望レストランやコンビニエンスストア、理容室などに面し、外来者も入院患者も気軽に外気と緑を楽しめる環境だ。

５階小児科病棟の中央にあるキッズガーデンは自然光や植栽やアートワークなどで子どもたちと家族に明るい療養環境を提供している。



病棟基準階４床室平面詳細図。
分散型トイレ利用と集中型トイレ利用のふたつのタイプの病室が隣り合っている。





18階の個室は窓の外に花壇が見える。トイレにはシャワーユニットが付属している（右）。
病棟基準階４床室は分散型トイレが設置された部屋と、集中型トイレを利用する部屋とのふたつのタイプが用意されている（左）。

一方、トイレ付きの４床室は東西方向にリニアに伸びる病棟の両端にあり、スタッフステーションからも少し遠い場所になっています。そこで病院側はこの病室に対し“比較的自立している患者さんに入ってもらう部屋”という考え方をとりました。従ってトイレも自力で使える可能性が高いとして、室内への設置を決定したそうです。

トイレごとの設備にもたくさんの気配りがつめこまれています。フラッシュはすべて手かざしセンサーまたは自動洗浄スイッチにし、感染制御と同時に流水量をコントロールして節水にもつなげました。これに付随する形で、４床室や集中トイレの女性用ブースに擬音装置をつける気遣いも見られます。また、院内全域の患者用トイレにはすべて手すりがつけられました。

外来トイレで目につくのは子育て家族に対する配慮でしょう。ベビーチェア、ベビーシートは男性用集中トイレにももれなく装備され、また小児科の集中トイレでは、子どもたちのための小さな便器も用意されました。

設計者と病院側が一緒に検討し決定したのが、集中トイレでの手洗い後のタオルの仕様です。医療スタッフ自

小児科の集中トイレには子ども用便器が完備された。手すりが付いた小便器のほか、洋便器も男女ともに子ども専用の小さなものが、低めのパーティションとともに設置された。

小児科病棟の廊下には、壁画のほかオリジナルのアート作品が飾られたニッチもある。

ら、用を足したあとどうすればもっとも衛生的かについて話し合いました。最終的には、各自がハンカチを持つのではなくペーパータオル類を使うことを病院全体でオーソライズするに至ったとのこと。その後は設計側とも協議を重ね、外来など比較的にぎやかなエリアのトイレにはエアタオルを設置し、病棟のように静けさが求められる場所ではペーパータオルを置くことにしました。病院環境とは自分たちの職場であると同時に、患者さんの生活の場であることを熟知しているスタッフならではの気づきともいえるでしょう。

空間性と芸術性で癒しをつくる

患者さんはもちろん、医療スタッフにもできる限りの快適さと癒しを提供したい。諸機能のレイアウトには、病院関係者と設計者のそんな思いが感じられます。

病院棟の高層部には、全部で４ヵ所のスタッフ用空間が５階・７階・12 階・16階に分散配置されました。病棟の１看護単位分のボリュームがそのままあてられたスペースは“スタッフエリア”と呼ばれ、執務用のデスクや当直室、ラウンジ、カンファレンスルームなどが入っています。従来はスタッフステーションにあった機能を３～４フロアごとにまとめて独立した空間にすることで、今までは難しかった異なる病棟のスタッフ同士のスムーズなコミュニケーションが可能となりました。また、病棟と執務エリアを分離することで病院内のスタッフゾーンが大きくならず、病棟内の看護動線をコンパクトにすることができ、さらには病棟から離れて落ち着いた仮眠がとれるなど、スタッフの働きやすさを考える面でもメリットは少なくありません。

遠藤さんとともに病院の設計を担当した山下設計第１設計部主管の三浦敬明さんは「普通の病室と同じような気持ちよい眺望もここにはあります。一所懸命働いている看護師さんたちが、この空間でいろんなストレスから開放されることは非常に大切ですよね」と力を込めました。加えて１病棟を単位とする空間は、将来的な用途転用にも対応しやすいと考えられます。

また、高層部と低層部をつなぐ６階には、入院患者さんと外から病院を訪れる人々それぞれの領域が重なりあう、一種あいまいな柔らかい空間がつくられました。東側には展望レストランがあり、西側にはお弁当や飲料を揃えたコンビニエンスストアと理容室が軒を連ねるこの場所では、入院患者さんは気後れせずに買い物や屋上庭園を楽しむことができ、外来の見舞客や近隣住民も、レストランで自由に食事をしながら屋上庭園や川沿いの並木を眺めて過ごせます。「寝間着の入院患者さんも、普段着の外来患者さんもこの辺りまでは気兼ねなくやって来られる。町並みのにぎわいが６階にもあるのです」と三浦さん。１階に広がるコミュニティストリートと連動し、病院内に都市機能を入れることで、外に開かれつながろうとする姿勢もうかがえる空間です。

そして、もっともストレートな形で癒しの思想を表現しているのが、院内各所に点在するアートワークやさまざまなサインでしょう。小児科では２階の外来と５階の病棟の両方に、かわいらしい立体アートや天井まで届く壁画がところ狭しと踊り、病気と戦う子どもたちとその家族の心をなごませる明るい治療・療養の場となっています。上層階の個室にも、アートワークが見られる部屋が用意されました。

院内各所のサインにも病院独自のこだわりが見られます。帝京大学医学部附属病院では、病棟、病室ではなく、それぞれ入院フロア、入院室と表示しています。“病（やまい）”という文字を使った従来型のネガティブな名称ではなく、患者さんに配慮したポジティブなネーミングとしています。また、病棟では壁部分の差し色などのシンボルカラーを各階ごとに変えています。「自分の階は赤っぽい色だったねと、親近感を持って患者さんが入院室に帰れるとよいですね」と遠藤さん。

地域の存在感ある施設として周辺環境と住民の暮らしに積極的に働きかけ貢献していく、そんな使命を帯びた大規模病院を冲永さんはこう語ります。「病院は患者さんあってのもの。ホテルにくるような気持ちで自由に訪れ、安心して入院してもらいたいです」